



サーミの歌、ヨイクをめぐる心の旅

川瀬 慈
 民俗人類基礎理論研究部

先住民サーミを描いた映画

北欧スウェーデンの先住民サーミの少女が、差別や迫害を受けながらも力強く育っていく姿を描いた映画「サーミの血」が、二〇一六年の東京国際映画祭でいくつかの賞を受賞し、わが国において話題になったことは記憶に新しい。この映画をおして、サーミとよばれる人びとについてはじめて知った方、興味をもった方も多いのではないだろうか。

サーミはノルウェー、スウェーデン、フィンランド、ロシアに居住する先住民である。トナカイの遊牧をはじめ、狩猟、漁労、農業などさまざまな生業を営んできた。またサーミは上述の国々において、同化政策やキリスト



サーミのロックバンド、アドヤーガスのメンバー、サラの幼少時代(すべての画像提供: ロッセッラ・ラガツイ)

教化のなかで抑圧されてきたことでも知られている。今回とりあげるのは、その「サーミの血」より少し前、二〇〇七年にイタリア人の人類学者ロッセッラ・ラガツイによって製作された、ノルウェーのサーミの無形文化をテーマとしたドキュメンタリー映画である。

心のよりどころ「ヨイク」

本作の主要なテーマは、サーミの歌ヨイクの継承である。ノルウェーには現在、約四万人のサーミが存在するといわれているが、ノルウェーの歴史のなかで、ヨイクはキリスト教とは相容れない、野蛮な実践として位置づけられ、キリスト教会からは「邪悪な表現」というレッテルを貼られ排除されてきたのである。本作の主人公、ノルウェーの若いサーミであるラウラとサラはヨイクの伝統的な歌唱法を継承すると同時に、ロックミュージックとヨイクの融合を模索するなど、ヨイクの革新に取り組んできた。本作では二人が率いるロックバンド、アドヤーガスのノルウェー本国や英国ツアーでの活動を追いかける。ラウラとサラは、伝統的なサーミのコミュニティ、家族との対話を大切にしつつも、同時にグローバルな音楽産業や視聴者とのつながりのなかでヨイクにあらたなアレンジを加え、歌い継ぐことに試行錯誤する。そのような本作は、ラウラとサ

「受け継ぐ人々」

原題: Firekeepers

2007年/ノルウェー/サーミ語・ノルウェー語・英語/57分

監督: ロッセッラ・ラガツイ

出演: ラウラ・ソンビー、サラ・マリエ・ゴープほか



アドヤーガスによる英国、マンチェスターでのコンサートの様子

ラの葛藤や模索を、人物の心情に迫る繊細なカメラワークで描き出すことに成功しているといえよう。

作品のいたるところに、サーミの人びとがヨイクの特質について自らのことばで説明するシーンが散りばめられているのが印象的だ。「ヨイクとは披露する歌なのではない、それはサーミの身体を支配する存在なのである」「感情が高ぶるなかで、サーミはヨイクを歌わずにはいらなくなる」「ヨイクは必要ときにサーミの肉体に降りてくるのだ」「ヨイクは大地の下に住むものからのサーミへの贈り物だ」「ヨイクをおして聖なる存在に助けを求めることができる」。これらの語りからは、ヨイクがサーミの豊かな精神世界について理解するうえで重要な役割を果たしていることがわかる。

民族誌映画とアイデンティティ

本作は、商業映画ではないものの、国際的なドキュメンタリー映画祭や人類学系の学術映画祭などで入選、受賞を重ね、高い評価を得てきた。民博においては、二〇一六年一月に開催された上映会「民族誌映画にみる文化への視点——台湾、日本、ノルウェー、エチオピアの作品より」



アドヤーガスのメンバー、ラウラとサラ

で台湾の原住民作家たちの作品との比較という観点から上映・議論された。上映直後におこなわれたシンポジウムのなかで、ラガツイ監督は、サーミが自らのために本作を使うことはもちろん可能だが、さまざまな葛藤を抱える他の先住民がこの作品をおして議論し、自らのアイデンティティの認識とその自覚の手助けになることを望んでいる、と述べていた。

伝統と革新のなかで揺れ動きながらも歌い続けるサーミの青年ラウラとサラの旅。二人は今後ヨイクにどのような色どりをあたえていくのであろうか。